

# 森林 レンジャー がゆく

(2)

## 炭焼きと里山

里山の話として、炭焼きが語られることが多くありますが、これまで目にした古い炭窯跡は、養沢神社から大岳に向かうサルギ尾根、松原村近くのオオカミ谷、盆堀の奥のクリノキヨウ沢など、里山とは呼ばれ



サルギ尾根 炭窯跡

ないような人里離れた奥山にあります。

「里山」という言葉は最近の造語で、田（農業）、

土（生産力）、山（森）を合わせたものと聞いています。里山は、化学肥料がなかった時代に農業生産を続けるための森であり、農業用の森と考えられ、材木や炭を生産する山とは区別されてきました。

里山の落ち葉は、田畑の肥料として活用されてきたため、里山には腐葉土がたまらず、本来なら土地のやせた尾根に生えるようなマツやモミも生えてきます。なぜ、里山と炭焼きが結びついてきたのでしょうか。江戸時代には「外山」という区分があり、藩の直轄林地や御用林の外周に、地域住民が自由に使える山として外山が存在していました。自分たちで用材を切り出して炭を焼き、山村の日々の暮らしを支えたと言われている。たぶん、この外山と里山が混同され、牧歌的な山村で炭焼きをするイメージが里山とされたものと思われまます。里山は、農業活動で利用が繰り返された人と自然との共生の結果として出来上がった森なのです。

杉野二郎（隊長）